

## 平成 28 年度第 1 回市川市史編さん委員会 会議録

高橋主幹 会議に先立ちまして、定足数の確認をさせていただきます。ただ今の出席委員は委員 10 名中 6 名であり、市川市史編さん委員会条例第 6 条第 2 項に規定する開催要件である、過半数委員の出席を満たしておりますことを確認いたします。また、本日の傍聴者はございません。それでは吉村委員長、よろしく願いいたします。

議 長 それでは平成 28 年度、3 月ではありますが、第 1 回市川市史編さん委員会を開催いたします。本日の議題は、「市川市史編さん体制の方向性について」ということですが、議事に先立ちまして事務局のほうから資料の確認をお願いしたいと思います。

高橋主幹 私のほうより資料の確認をさせていただきます。お手元の資料は、平成 28 年度市川市史編さん委員会の次第でございます。その後に、資料 1 から 4 まで A4 で 4 枚をつけさせていただいております。議題に関する資料につきましては、以上でございます。皆様不足等ございませんでしょうか。計 5 枚です。

議 長 それでは早速議事に入らせていただきます。「市川市史編さん体制の方向性について」審議いたしますが、事務局のほうから説明をお願いします。

河野課長 それでは「市川市史編さん体制の方向性について」ご説明いたします。はじめに、お手元にお配りしております、資料 1「市川市史編さん基本方針」をご覧ください。

市史編さん基本方針につきましては、皆さま、既にご承知のことと存じますが、本市の貴重な「自然」や「歴史・文化遺産」を市民共有の財産として後世に継承していくことを目的として、市民にとって、「わかりやすく・親しみやすい市史」として編さんしていくものでございます。

資料 2 の「刊行計画」をご覧ください。市史本編の刊行といたしましては、平成 28 年 3 月に自然編を刊行させていただきました。

今後の予定としましては、平成 30 年度には、歴史編の第 3 巻「まつりごとの展開」、第 4 巻「変貌する市川市域」を予定しております。

その後、31 年度には、第 5 巻の民俗編、32 年度に、歴史編の第 1 巻「地形と環境」、33 年度に、歴史編の第 2 巻「ムラとまち」、第 7 巻の「通史編」の刊行を予定しております。

再来年度以降、毎年、刊行をしていくこととなりますが、本日、「市史編さん体制の方向性」を議題とさせていただきましたのは、以前より継続してご審議いただいております、第7巻「通史編」について、あらためて編さん委員の皆さまよりご意見を伺いたく、議題とさせていただいたものでございます。資料4「通史編の内容について出された意見」をご覧ください。こちらは、平成26年度に行われた第2回編さん委員会で「通史編」についてご審議いただいた内容をまとめたものです。

26年度の編さん委員会では、教育委員会から刊行された「図説市川の歴史」が各時代をバランスよく収録したものであり、また、市民にとってわかりやすく親しみやすい内容であることから、市史編さん事務局から、「図説市川の歴史」を通史編に代わるものとして位置付けることが可能かどうか、また、委員の皆さまから通史編のイメージについてご審議いただきました。

通史編は、市史編さんの最終年度にあたる平成33年度に刊行を予定しております。来年度、歴史編2冊が本格的に刊行に向けた活動に入りますことから、通史編の位置づけや、構成内容を検討する時期にあたるかと考えております。

前回「通史編」についてご審議いただいた際に、通史編にかかる小委員会を開催するという事で委員の皆さまよりご提案がございました。来年度はじめに歴史分野を中心とした通史編に関する小委員会を開催し、改めて通史編のイメージなどについてご意見をいただきたいと考えております。

説明は以上でございます。

議長           ただ今事務局のほうから説明がありましたけれども最後に言われた通史に関する事で、資料4に書いてありますけれども、何かその後ご意見があるのでしょうか。どうでしょうか。今回は問題別・テーマ別ということになっていましたので、最後に通史編を出そうというそういう方向でやってきたのです。まだ自然編1冊しかできてないものですから、各テーマも見ないと分からないというところもあることはあるんです。さっき説明がありましたように、今年度はもうできないので、来年度そういう小委員会みたいなものを作ってやるという、特に歴史が中心になるということだったと僕は記憶しております。そういう方向でいいでしょうか。竹内さん何か。

竹内委員       僕は前やるということでね、賛成はしていたんですけど部会で議論したらですね、『図説市川の歴史』は非常にできがいと、いつもの意見と違ってしまうんですけど。図説をもう一度見たんですけども、かなりできいいんですよ。もちろん見たでしょ。

議長 見てます。一般的にわかりやすい形になっているのは事実です。

竹内委員 今度も中学生が本編のほうでもね、中学生が市内の高校生、中学生が読んでも（わかりやすいように）ということでやってきたわけですよ。ちょっと難しい部分いっぱいあるけれど、新しい今度の本編のほうは、私たちは今委員長が言ったように、編年史的に組んでいない。塊として近代の市川、近現代の市川が首都圏などでどういう変貌を遂げたかというのを総体として明らかにするということになってくるから。勿論、明治・大正・昭和といかないんですがね。だからそういう意味であったほうがいいと僕は思っていたんだけど、どうも皆さん難しいようで。僕もよく『図説市川の歴史』を見ましたら、よくできているということだから、どういう通史を作るかというのを本当にもう一度考えていかないと。『図説市川の歴史』と、この間の位置づけみたいなものを考えないと。

議長 ただ最初から議論してましたけど、今各巻に書いてもらう方がすべて執筆員になるということではないということです。やはりたくさんの方が書くとどうしてもうまくいかないんですよ。やっぱり人数はある程度絞って書かないと、通史にはなりづらいのが多いんですよ。

竹内委員 統一性をとるためにね。

議長 今回は、例えば日本史を書いて市川をちりばめるって、そういうことでは勿論ないわけです。いわゆる日本通史があつて市川のことをあげていくということだったら、それほど意味があると僕も思いませんけれど。ただ、1、2、3巻というのはやはり図説とは違った新しいものも見直されるでしょうからね、そういうものを反映して将来に残すことは僕は意味があると思う。だから執筆者も30人40人となるとそれはもう読めないですよ、正直言って。

竹内委員 まあ、文体の統一とかにしても(難しい)。巻だと、その巻の特徴で、押し切れるんだけど。

議 長 せいぜい10人くらいだと思いますよ。

竹内委員 ボリュームとイメージと『図説市川の歴史』のスタッフで書かれたことと、どう何か特徴性を出すかということ、小委員会で本気でやらないと、何か作っただけになるのは。あと今言った負担感の問題。

議 長 同じ人に書くと同じようなことを書かれてそれは意味がない訳ですよ。それぞれの巻にはやはり主題があるわけですから、そういうものをさておいて市川の通史というものをどういう形でやるか。

竹内委員 そのところの議論を小委員会でして、機軸を（決めるべき）。ボリュームも含めて議論のうちに入るという。

議 長 八戸に行ったときに、『八戸市史』を見ました。各巻の構成とそれから通史があって、通史はかなり構成を変えているんですね。しかも通史だけ買ってみたいな、そういうやり方をしました。それと安価版、廉価版ですかね、図説（別冊）みたいなものがありました。だからそれぞれ僕は目的が違っていいようにも思うんですけどね。今回2冊報告書が出ていますけれども、そういうものを生かしたものを残さないと、また30年40年後になったときに大変ですよ。

竹内委員 だから、ある種たたき台になる必要があるかもしれない。

議 長 というような気がしているものですから、ただ参加している人全員に書いてくれというとそれは嫌だろうというか、むしろ、それを超えて通史というのができる、できないかというのを含めて（検討していく）。

竹内委員 『市川読本』は出来がいいと思うんですよ。そういうのももう一度検討しなおして、小委員会でスタイルをどうするかということを検討すればいいかもしれない。

議 長 全てのことを網羅しようとする、さっきも言ったように日本史に少し市川のことが載せてある程度になる。市川を舞台に通史を書くということになるとまた別かと思います。いいでしょうか。いずれにしても小委員会で議論をもう少ししましょう。やっぱり作るとなるといろいろな意見が出てくるでしょう。

山崎委員 どういう切り口にするかっていうのを決めて、ある程度揉んでそれから大方決まるんじゃないかと思います。

杉原委員 　　少し後手になるかもしれないですよ。やはり、2巻3巻4巻の内容がどうであるかというのがわからないとイメージが湧いてこない。

議　　長　　では、来年度小委員会を作るということで。

竹内委員 　　発想をきちっと持たして。通史編はコンパクトな要約版でもなんでもない。

議　　長　　勿論違いますよ。他市の市史、県史の例なんかを勉強したほうがいいように思いますね。せっかく作る以上は面白いもの、歴史の面白さを発揮できるような通史にしたいと誰もが思うんですけど、「言うは易し書くは難し」でね。じゃあ、次年度ということで、やらして頂くっていうことで行きたいと思えますけど、いいでしょうか。特に何か事務局のほうでありますか。

高橋主幹 　　小委員会ということで、人選的なものがいろいろと皆様にご相談申したい部分があるんですけど、私どもが勝手に決めるわけにはいきませんので。専門部会という形で委員長に召集していただいて、編さん委員会の下部組織という形で、歴史の方々を中心にもう一度お集まりいただくというのも一つの手だと思っておるんですけど。

議　　長　　若手中堅が入って欲しいんですけども。

山路学芸員 　　いいですか。その際、こういう大学の先生だけではなくて、市川市内の社会科学の先生に入っていただきたい。実際、小中、高生に読んでもらうとなると、その教材としても使えるような内容にしないと、出した意味がないと思うんですよ。ですから是非そういう方も小委員会にオブザーバーとして呼びして、大学の教員と違った切り口というものがあると思いますので、そういう視点というのも必要じゃないかと。私は最近学校の先生たちとお話する機会がいろいろありますので、そういう機会を設ける小委員会であるべきではないかと思えます。いかがでしょう。

議　　長　　いいんじゃないでしょうかね。

高橋主幹 　　では早速一度メンバーをお話をして、今、山路学芸員からのお話にあった教育委員会の協力ということで、学校の先生方を検討させていただこうかと思えます。

議　　長　　いや、実際やっておられる方がおられるんですよ。市川におられるかどうかわかりませんが、高校の先生にかなりわかり易い本を書いておられる方も多くおられます。

山路学芸員　　いずれにしても市川で出すんですから、教育委員会の社会科の勉強会には一言声をかけておいて。特に小学校はともかく、中学校の先生に一人そういうところから来てもらって引継ぎでやってもらおうと、やっぱり市史に対する教育現場の関心も高まると思うんですよね。

議　　長　　検討事項で。適宜、人のこともあるでしょうから。あんまり機械的に、中学校1名、高校2名、大学1名とかそういうことはやめたほうがいい。

竹内委員　　場合によってはほんとに広報で公募なんてことをやると大げさになるのかな。

高橋主幹　　いや、大げさになることはないですけども、教員の方であれば教員の方にお声をかけたほうがいいのかなと考えているところです。

米屋委員　　ちょっといいですか。歴史の流れの現代のところ、特に今現在市内で多くの人が集まるような年中行事であるとか、それから大事な行事であるとか、そういう今現在の市川が表現できるようなものが現代のところにあっていいんじゃないかな。ただ歴史の流れだけではなくて、ということ为先ほど小中学校の現場の先生のご意見を、というときに、そのあたりのところを視点を入れていただければ面白いものができるんじゃないかなっていうような気がします。

竹内委員　　そういう意味でも本当に、どういうものにしようかということ、今米屋先生が言ったようなことを議論したほうがいい。

議　　長　　小委員会だね。小委員会でも、あるいは編さん委員会でも両方でもかまわないわけです。

山崎委員　　（小・中学校だと）レベルが違うんだから、教育委員会のどなたかで出た通史を焼き直して作ってもいいし、小中、ことに小学生をターゲットにすることはないと思います。

議　　長　　よく執筆のときに義務教育の方も読めるようにと言いますがけれども、そういう目標に掲げてようやく一般の方も読めるみたいで、下手すると一般の方も読めないような叙述が実際多いですよ。だから、中高といっても実際中学生が理解できるっていうのはかなり困難かもしれないけど。

山崎委員　　中学生もかなり2年生になると、知能がぐんと伸びるんですよ。

竹内委員　　少し発想を変えてアイデアを。今、山崎さんが言ったような事を含めて。

議長 最初から硬い通史を考えていなかったと僕は思っているんです。今回の市史は問題史的に作るので、全体の流れを判るようなものがほしい。

竹内委員 当然のことながら自然も民俗も勿論入るわけでしょ。

議長 いや、ただ歴史を中心にすると言うから冒頭に自然編とか、そういうことはやめようというような理解だったかと思うんですよね。そうしないと、また結局縮小版にならざるを得ないので。

竹内委員 その意味では、融合できるようなものにしたら、かえって面白いね。

議長 歴史の流れにすれば各所に自然が出てくる形でもかまわないし、今言われた民俗は近世でも近現代でもいいでしょう。なかなか難しいですけど、実際はね。

竹内委員 人文の歴史の中に生き物ってのを入れるのは結構難しいでしょ。

山崎委員 結局は環境的な形で（入れることになるかと）。鎌ヶ谷市は小学生向きのものがあるんですよ。それも生き物を通して自然の環境を語るような形で書いてあります。

竹内委員 それは新しい発想になるかもわからない。

議長 動物史というのはあるんだけど、これはなかなか難しいですよ。

竹内委員 環境史とおっしゃったけれど、過去に市川にいたけど今はもう消滅してしまったようなものとかというように、そういう都市の変化というところで組み込んでいけるような事が可能かもわからないですね。

議長 文体のこともあるので、枠組みを決めて少人数の方がずっと目配りしながら書かないと。また、この部分は自然の人が書いてくださいと言うとなかなか難しい。

竹内委員 そういう意味で今の議論はしておかないとね、ここはもう自然だからと、また任せてしまうとなると（難しい）。

山崎委員 そういうところが決まらないと、例えば鹿がいたよとか、狼がいたよというのは昔の話で、江戸の最後に鉄砲で撃って狼を切り刻んでみんなに分けたっていうのが鎌ヶ谷市史に載っていますよね。だからそういうのを利用して書いて

もらう。それは、狼が何故いたかという、鹿がいて、いろんな動物をとって食べるからであって、だんだん開墾されていったら狼が住めなくなるよ、鹿が住めなくなるよということで、うまくまとめたわけです。

杉原委員 実際自然を通史の中に入れて行く場合、時代時代に、歴史に合わせて自然を入れていくのは結構難しいんですよね。その時代時代によって情報が多いところと少ないところがあるので。それからあと例えば、どこが海でどこが陸だったかっていうそういう地図を入れる、そういうことがありますね。そうすると、もう地図のスケールがみんな合わないんですよね。昔考古で扱う時代の地図のスケールと江戸時代の地図のスケールがみんなこう違うっていうね。ということで、統一感が取れないということがあってやっぱり実際やってみると自然を組み込んでいくというのはなかなか難しい。

議長 議論をかきまわしてしまいましたけれど、小委員会でもう一度議論を。あるいは、最初は勉強会でもいいんですが。それでは、ほかに議論議題がなければ、一応方向性ということで。

山崎委員 すみません。提案したいんですけど。市川市史の年表という話が2、3年前に出たかと思うんです。やはり年表がないと全体が見られないということもあって、是非年表を作りたいな。そしてできれば私の使った経験からすると細かいほうがいいなという感じがします。どちらかという前の年表がそうですけど、すごく細かくていろいろと掘り起こすには役に立つものなのであって、約50年出てませんので、作ることにしていただけたらということと、私、ここへ来て何もないんで寂しいもんですから、やってみたいなっていう気もするもので、審議願いたいということです。

杉原委員 前の市史を刊行したときに、年表を作りましたね。その年表に元の文献が出てこない。だからどこから採ったっていうのがわからない。それで、非常に詳しく、使い道があるんですが、我々のところでも江戸時代の災害とかそれから明治時代の災害っていうところで、その文献の部分をこの時こういうことがあったというのがわかって、それを詳しく調べようとするんですが、引用文献はあんまり詳しくないもんですから。

議長 出典がないですからね。

山崎委員 今回の場合はエクセルがあるからそれに入れて、出典まできちっと入れといて、発表するのは出典を入れなくてもデータとして残りますから、それがあればかなりできるし、それから何人かでやった場合、出ている資料が数種類出てきてもそれはそれでまとまりますから。

杉原委員　　今度出たそれぞれの巻によってそこから文献を、年表を作って行くということですか。

議　　長　　いや、違うんじゃないのかな。

竹内委員　　これは体制の問題に関わりますよ。年表で一人本気で作る人に関わっていたかないと、今山崎先生がおっしゃったようなものはできないですよ。つまり、近現代の自分たちが書くときに、使う使わないは別だけど全部出典を明らかにして、一応出典としては使っているわけですよ。山崎先生がおっしゃったように、あるいは杉原先生がおっしゃったように、どこにそれがあったかっていうのを全部市川市史年表新編に作るのは片手間じゃできないんで、専門の人がいないと絶対できないです。

山崎委員　　何人かでワープロを入れて、しかも資料のあるところに部屋でも隅に借りて、一つの資料を一人がやって順番につぶして行って、最後にやはり一緒にしてやらなければ。今、他の所で年表を作っているんです。それは自分の必要なところだけですから楽ですけど、市川市全体のことをやったら大変だなと思いがら。

議　　長　　僕は市史はほとんどやってませんが、普通は、県史とか市史をやるときには各時代の資料集を作るんですよ。例えば『大日本史料』の全部に目を通すとかね。実はそれをやるんですよ、各都道府県。今度東京都の府中市史がまたやるんですが、まずは資料調査から始まるんですよ。これは、やっぱり一人では無理ですね。時代ごとに何人か委員を決めて、その人が『大日本史料』も全部揃ってませんので。いや、そこまでやる意味があるかどうか。

山崎委員　　今度のは前のあとですから。

議　　長　　前もそこまでやってないですよ。

竹内委員　　今の話の続きだけど、村田先生にお聞きしますが、新たに昔の年表のところで、重要なもので欠落しているようなものは、発見されましたでしょうか。

村田委員　　あんまりない。近世に関してはそれほどないですね。

議　　長　　千葉は『千葉県史』があるので、ある程度はわかりますけどね。それ以降になるかと思えます。

竹内委員　　そうすると近現代中心と、自然編と民俗のところでの物を組み込んだ形の年表だけど、おっしゃるように非常にいい年表なんです。細かくて。ただ確かにどこに根拠があるのかわからないんだけど、非常に細かくっていいんで、そうして行政の資料をかなり、あれがあれば何月何日に市川市で何をやったみたいなのが、わかりやすい。

議　　長　　それは議会史もあるでしょうし、わかるはずなんですよ。

竹内委員　　だけど誰か（担当を）付けないとできないよね。

山崎委員　　前のを見るとかなり行政の資料を、図書館に公表されたんじゃないものも入ってるんですよ。本来ならそういう行政の資料でも、終わったらちゃんと市史のように束ねて図書館のどこかに預けておくと、それが一番いいんですけども。

竹内委員　　もう一度言っていていい。責任者を一人（決めないと）、職員も含めてだけど。片手間にはできないですよ。

山崎委員　　リストがあって紡ぐだけでいいんですが。

議　　長　　市史と一緒にする予定でしたか。

竹内委員　　年表も作る予定だったんですか。この中に。前の予定は。

矢越専門員　　本来はその通史編と年表が1つだったかと思います。

議　　長　　そうなんですよ。だからそういう年表でやるのか、あるいはとことん調べ直すか。

竹内委員　　通史編と年表が一体という考え方。

矢越専門員　　年表が前回の続きの部分の年表を作るという予定だったので、合冊にすれば一冊になるという予定だったと思うんですけど、その作り方を同じ精度で古代から全部手を加えるのであれば、一冊ともう一冊になってしまうと思います。

竹内委員　　そうか、通史編の後ろに付けるんだったら、ボリュームとしてもそんなに考えていないわけね。今までの年表は本当細かいので、厚くなっている。

議　　長　　あるいはその補訂版で。

竹内委員　　だから載ってないものとか、修正する部分が各分野のところであって、明らかに民俗は多少入っているかもしれないけど、自然はほとんど何も入っていない。

山崎委員　　入れる人と、それからこれを載せるか載せないかという論をただ機械的に集めることに始まります。

竹内委員　　それと現代。そのこのところをもう一度拾いなおして、それは人手間があればできる仕事ですが。ただやってくれと言われても、ちょっと大変だから簡単には引き受けられない。

議　　長　　はい、これは大変なんです。僕も日本史年表を作った経験があるんですけど、もう何年間か取っ掛かりがないと、とても難しい。既にできているものを集めるのは簡単にできますけども、今はもう相互依存になっていて、どこか一箇所間違えるとずっと間違ってしまうというのが結構あるんですよ。だから最終的な一次資料からちょっと考えていこうとすると。

竹内委員　　山崎先生の年表のイメージが、はっきりわからない。

議　　長　　いずれにしても通史編を作るなら年表ぐらいと思ってましたけどね。ただ全部市川に入っていることを網羅的にやろうとすると、これはまた一つの仕事ですね。

竹内委員　　その通史に適合的な年表でいいということですか。

議　　長　　つまり、通史編が300ページだとすると1割2割ぐらいですか。でも前回からいくとそれはできないでしょ、縮小版になっちゃう。

竹内委員　　前の年表を各分野で「これを落としていいよ」という判断をして、再編成して、おっしゃったように市史が出てから以降のところは比較的詳しく、落ち度のないような形で。これはやっぱり繰り返すようにいろんな情報があるから、昭和30年代・40年代以降から今だから、そんなに大変じゃない。そういう年表を、この通史編の後ろのほうにつけるとすれば。  
古いところをもう一回再検討して、遺漏がないかどうかとか、要らないものをどうするかというのは（難しいのでは）。

村田委員　　特に要らないものをどうするかっていうのは、とても大変。

議長 結局、第一次史料に依拠して作る年表っていうのは大変なんですよ。今まで既成の年表を使いながら作るのは楽で、以前私が手がけたものは、カード化して作っていました。だから最初から一次史料に当たってやるのは（難しい）。要領にもよりますけどね。だからどの程度のものを作るかを議論していかないと、むしろ分量に規制されるところもあるし、市川のを全部拾うというのは、近現代は無理ですけどね。それは無理ですけど、近世も多いでしょうけどね。それこそ『大日本史料』市川版を作るのは、これはもう大変。ただ、通史やるんだったらある程度年表がないと、できないことも事実ですけどね。どうですか。すぐここでやるよりか、次年度に。

竹内委員 山崎先生の提案をやるのであれば、たとえば、カレンダーにする。ツバメが来た日というのを、自然の、鳥の人たちは市川に何月にツバメが来たって発見した人が、カレンダーになって載る時があるんだよね。そういうものも含めて、自然のものも含めて年表を作るというのは、ものすごく大変。

山崎委員 市川市で何が起こったか、たとえばここはいつ落成したとか、どこどこで移ったとか、市長が替わったとか、そういう年表をいわゆる前に出た年表がありましたよね、あれの追加ですから、出るときは50年近くなりますけれども、それ以降の市川市で起きた事柄を全て記入すると。

竹内委員 現代史年表ですね。

山崎委員 ですから、今出るものの項目に載ったものは、全てその年表に載らなければならぬと思うんですね。

議長 議会では作っておられないんですか。行政年表みたいなものを、市川の場合は。

竹内委員 私の記憶では、市政概要という議会の人たちの、議会でするものの中に市政概要というのがあって、その中に各年度相当、30項目くらいだと思うけど、あることはあるんです。毎年それも繰り返し出しているから、それと市の起こった大きなものは拾えますね。ただあれは企業のことまで出てないから、例えば京成本社が本八幡に移転したみたいな、新聞とか、市民新聞とか、昔は中央図書館で市川市関連記事一覧っていうのを作ってたんだけど、今はやめています。

山崎委員 どこかの駅が開業したとかという時に、調べなきゃならない。例えば、行徳の開発のときに、東西線ができた、行徳駅が開業した、それでは話にならないですよ。何月何日に開業したと書かないと。そういう意味で市史があれば、ち

ゃんと年表などに書いてありますから。

竹内委員 現代史ですね。前の市史年表のあとのを補填すればいいということね。

高橋主幹 すみませんお話中。今、部長とも話をしまして、一応議会等では先ほど竹内先生がおっしゃったように、本当に簡単な内容ですけれども年表のような形で出来事を書いてあるものはあると。それから、秘書課のほうでもスクラップしてあるような資料としては、まとまっではないけれど、資料としてはあるという状況、ということです。ですからそこは調べてみてまた小委員会の時にでも、ご報告はさせていただきたいと思えますけれども、それぞれでとっているようなところがあります。竹内先生もいろいろ調べていただいていると思いますので、第4巻の関係で全部見ていただいていると思うので、今更というところもあるかも知れませんが。

議 長 わかりました。次年度でどういうものを作るかを含めて、今、主幹が言われましたように検討するというか、増補版を作るんだったら増補版を作るということになるでしょうし。

杉原委員 そうすると年表は作るという方向でいいですか。

議 長 いや、次年度検討します。

竹内委員 増補版を作るということですよ。

議 長 いや、それを含めて検討します。では、事務局も含めてどういうものができるかというのを検討するということですね。予算の範囲もあるし、担当者をなんとかつけてもらえるかどうか。あるいは増補版ということだと、比較的簡単かどうかわかりませんが。ただ、せっかく作るんだったら市史の一環なので根拠をはっきりさせるということをしておかないとだめですよ。いいでしょう。

山崎委員 私のイメージでは市川市に起こった出来事は、全部わかるように。50年間ですから。例えば八幡市民談話室が市川信用金庫だったんですよ。これから閉めますけど、本八幡十字路のあの談話室ですね。その信用金庫が、三菱銀行がやめたのでそちらに移って、市で八幡市民談話室としてやって、そこで市川環境研究グループが二回目の甲虫展を開いてるんです。その写真もあるんです。ですが、いつどうなったかということを追っていくときに、インターネットで談話室を調べても、いつ開館したとか、沿革が載っていない。

議 長 沿革ぐらい書いてあってもよいかと思いますが。

山崎委員 そういうことを調べたくなるんだったら、今までの細かい、何とかが開業したとかそういうことまで書いてありますから、そういうのを選んでからどれを載せるかは別問題ですけど、とにかく市民に関係ある事柄を網羅したものが欲しいなという気持ちなんですけど。あれば皆さん利用するんじゃないかと。

議 長 市役所にはそういうものはないわけですか。市史編さん局でなくて構わないんですけど、普通大学だったらある。大学史というそういう部局がありまして、そこでほしい関係書類を集めていくということになるんですけどね。旧市史の資料を見ると、市史年表の編集委員会は別途組織がいますね。

杉原委員 山崎先生が言われたように、前の市史が出てから後の年表を作るのはこれは完全に必要ですよ。前の市史は、年表が細かいので参考になる。この年表から文献を探そうとすると、文献の出典がないので、詳しい事がわからないんですよ。

議 長 カード化して作ったわけじゃないんですよ。さっき言われましたように、記事としては出典は書かないけれども、数字で表すというのがありますけれども。カード化しているところがありますけれども、カードを保存するというのはまた難しいんですよ。

竹内委員 後ろの方にデジタル化して、岩波の総合年表みたいな形にするという方法もあります。ああいう風にすれば、どこへという風にたどれるから、それはそれで必要かもしれませんね。

議 長 では、次年度の割と早めにでも（小委員会を開催するという方向で）。すぐ結論が出るかどうか別にして通史と年表のことも含めてどうするかで。前の市史では、各時代別に調査員がいます。古代・中世・近世で委員も含めて4名、近代3名、現代が6名いますからね。  
次回また高橋さんと相談して、通史のところにそういう年表の話題を入れて、まあどういうものを作るか作らないかも含めて議論していただきたいという、ことでいいでしょうか。

・・・合意・・・

議 長 それでは、他にご意見がなければ議題が終了と言うことになりますけれども、如何でしょうか。

河野課長 議長、一点よろしいでしょうか。

議長 はい。

河野課長 皆さんはもうご承知のように、平成 30 年度刊行予定の第 3 巻と第 4 巻をはじめとし、歴史編は今後本格的に執筆及び編集を開始いたします。今回の新しい市史はテーマ別となっているため、複数の時代と分野により構成されております。特に 2 巻と 3 巻につきましては時代や分野が多岐にわたりますことから、それぞれの時代や分野が活かされた市史となるよう、また、各時代の独自性が活かされた内容となるよう編さんと執筆を進めていきたいというふうに事務局の方では考えております。このことについて、今一度ご確認をお願いしたいと思っておりますが、お願いいたします。

議長 はい。ご存知のように今日資料を見ていただければわかるかと思いますが、第 2 巻がムラとマチ、第 3 巻がまつりごとの展開ということで、テーマ別ですので複数の時代になっています。各時代の中身も違うと思いますから、独自性が活かされるよう市史の編さんを進めていく上で、確認したいということですが、何かご意見はあるでしょうか。それぞれの時代とか分野を尊重するという、それはいいのではなかろうかと思うんですよね。よろしいですか。十分ではないかもしれませんが、編さんの方向性ということで、来年度小委員会を作って、検討する課題が多いということなんですけれども、本日のそういう方向性の議論はこれでいいでしょうか。それでは、どうもありがとうございました。